

# 公益財団法人日米医学医療交流財団 留学助成

## 研修報告書 (2022年度 助成者)

作成日 2022年8月25日

氏名 (フリガナ)	山本さわ華 (ヤマモトサワカ)
研修先機関名	Hawaii Tokai International College
研修期間	2022年8月15日 (月) ~ 8月20日 (土)
大学名	昭和大学
学年	5

私は来年、海外臨床実習に参加することを検討しており、その際に必要となる、医学英語や英語での問診、ケースプレゼンテーションのやり方を集中的に学ぶため、本プログラムに参加した。自大学でも臨床英語の授業はあって、やり方は学んでいたが、自分の言葉でスムーズに行うことはできないという状態であった。本プログラムではまず午前中のクラスで参加者同士、問診をとり合い、クラスのメンバーの前でケースプレゼンテーションを行い、フィードバックをいただく。毎回違うメンバーと問診を取り合ったのだが、人によって使うワードの選択が全然異なり、よいと思ったフレーズは盗んで自分も使ってみたり、いただいたフィードバックを元にプレゼンの方法を改善していったりすることで、少しずつ上達していくことが実感できた。夜のクラスでは JABSOM の学生から問診をとり、それをドクターにプレゼンした。これを時間になるまで何度も繰り返し行うことで自信が付き、堂々と行うことができるようになった。

もう一つ印象に残った授業は PBL だ。PBL の授業は自大学でも行ったことはあったが、臨床診断、検査、治療を考えることに特化した今回のようなシナリオは初めてで、かつ英語で行うということに最初は戸惑いを覚えた。JABSOM の学生は普段の授業の大部分を PBL 形式で行っているようで、レベルの高さを感じた。まずシナリオの臨床文の中からキーポイントとなるワードを抽出していく。それをもとに鑑別疾患をどんな細かいものでも挙げていく。そしてそれを鑑別するのに必要な検査を考えたらうえて、シナリオの続きの身体所見などを読み、疾患を絞っていくというものだ。鑑別疾患を列挙する際、私は最初間違いを恐れて深く考えてこれは違うのではないかと発言するのをためらってしまったが、現地の学生は頭に浮かんだものは何でも挙げていく。そして挙げた上で、この点が一致しないから考えにくいということを述べ、よりそれを明らかにするための検査法なども考えていく。その過程もグループで共有することで、多くの疾患について深く考えることができ、より知識が深まっていくのを感じた。日本では疾患ごとに知識を付けていることもあって、症候から鑑別疾患を考えることが苦手だったが、医師として診断をしていく際は症候から考えることがメインである。この PBL は頭の工具箱を増やすトレーニングになったし、普段の自分の勉強方法を見直すいい機会になった。

また今回のプログラムで自分を成長させてくれたものの一つと一緒に参加したメンバーの存在がある。全国の医学部から集まった参加者は英語力に関してはもちろんのこと、医学知識についても豊富で、自分の将来についての展望をしっかり持っていて、やる気に満ち溢れていた。普段なかなか知り合うことのない他大学の医学部生と1週間という短い間ではあったが、寝食を共にし、勉学に励めたことは、私にとって大きな宝になった。この経験を忘れず、モチベーション高く今後も勉学に励んでいきたいと思う。

最後になりますが、コロナ渦の状況の中このような貴重なプログラムを開催して下さった、公益財団法人日米医学医療交流財団の方々、小林恵一先生、HTIC の方々に心より感謝申し上げます。